鎌ケ谷市

チーム名 【チームオレンジ】
タイトル 【認知症にやさしいまちづくりの歩み】

1　自治体情報（令和７年１０月１日現在）

人口	高齢者人口	高齢化率	面積
110,034 人	31,178 人	28.3%	21.08K ㎡
鎌ケ谷市は こんなところ！	鎌ケ谷市は千葉県の北西部、北総台地のなだらかな緑の大地の上に広がる都市です。 市内には、東武野田線・新京成線・北総線・成田スカイアクセス線の鉄道 4 線と道路網が発達しており、都心から 25 キロメートル圏内にあることから、首都近郊の住宅都市として発展してきました。 一方、こうした発展の中にありながら、豊かな農地や緑の環境を持ち、梨の名産地としても全国にその名を知られています。		

2　活動の概要

開始時期	令和４年１月
実施主体	□市町村　　■地域包括支援センター ■住民・ボランティア　□社会福祉協議会 ■その他（　　）
活動内容	・ロバのマスコット作りを通じて、ご本人・ご家族の居場所作りをする ・地域のイベントに参加し認知症普及啓発活動を行う
活動頻度	月１回程度、地域のイベントに関しては随時参加
参加費	なし
運営財源	□市町村からの委託　■市町村からの補助 □会費・参加費　　■その他（　寄付　　） ※上記の財源 □市町村一般財源　　■地域支援事業交付金 ■その他（　個人　　）
メンバー構成	ステップアップ講座受講者（オレンジサポート員)、住民、認知症の本人、地域包括支援センター職員、認知症地域支援推進員、医療・介護関係職員
チームオレンジ コーディネーターの属性	認知症地域支援推進員

チームオレンジの類型 ※１	□第１類型（共生志向の標準タイプ） ■第２類型（既存拠点活用タイプ） □第３類型（拠点を設置しない個別支援型タイプ） □その他
チームオレンジ三つの基本について　※２	■3 つの基本を満たしている □3 つの基本は満たさないものの仕組みが構築されている

３　チームオレンジ結成までの流れと経過

令和４年１月に新たにオレンジサポート員となった方が住む築 40 年を超える住宅団地を中心に、コロナ禍中の閉じこもりがちな生活と、交通の便が悪い立地条件などを踏まえて、歩いて少人数で通える場所（サポート員の自宅）でロバのマスコット作りをスタート。『登下校する小学生のランドセルにロバのマスコットをつけてもらうのが夢』と言うメンバーの言葉に、認知症地域支援推進員が関係者への周知活動をサポートし、輪が広がる。活動拠点も住宅団地内にある市の事業の高齢者の交流の場である老人憩いの家の集会室に移り、毎月１回の定期活動化と日頃の自宅での作成活動にも発展。時には認知症の方や介護者も参加される機会もあり、近隣施設や地域のスポーツ団体の監督から材料の寄贈や、管理事務所の方が一緒にロバを作ってくださることもあり、周囲の理解や協力も広がり出している。

また、別の地区のオレンジサポート員と認知症地域支援推進員が認知症カフェの開催時間に集まりロバを作り、交流の輪を広げて普及・啓蒙活動を行っている。また、ロバ以外にも拠点によって、「認知症マフ」を作成しているところもあり、各拠点で特色が出てきている。

４　活動内容

ロバ、認知症マフ作り等をきっかけとして定期的に集まり、認知症の普及啓発活動を行う。地域で認知症のような症状がある方、または認知症の本人を誘って一緒に制作をすることで、地域の輪を広げて顔の見える関係づくりを行う。多職種がメンバーになることで、困りごとがあった際に必要な支援に繋げることができる体制を作る。

作成したロバは認知症サポーター養成講座を受講した小学生や高齢者と関わりのある民生委員等にお渡しし、身に着けていただくことで認知症の普及啓発活動や見守りをしていただいている。

認知症マフに関しては、市の事業や地域包括支援センターのイベント等で希望者に配布している。カフェを活動拠点としているオレンジサポート員はカフェのイベントに参加しながら、認知症の本人・その家族の話を傾聴し、一緒にロバ作りを楽しんで交流を行い、地域に根差した関係づくりを行っている。

令和８年１月現在、６か所の活動拠点があり、交流の場として定着しつつある。また、地域のイベントに参加し、認知症に関するクイズラリーや作ったロバをお渡しして外部発信を行っている。
活動拠点によっては、自分たちの地区で地域包括支援センターと協力し、家族交流会を開催している。

北中コミセンロバづくり



このはベース　ロバづくり



認サポ　GH 理事会



5　活動を進めていく上で失敗したこと・工夫したこと・配慮したこと

住民の主体的な活動とペースを尊重し、ロバを作ることだけが目的にならないように、認知症地域支援推進員が一緒に参加し、普及・啓発活動を行った。
活動拠点や外部との交流が増えたことで、認知症普及啓発と離れた方向にいってしまう可能性があり、中心となるメンバーが軸となる認知症の人への理解や交流の場、地域作りの考えを持って活動していただくようにしていかなければならない。また、ひとつのことに執着し過ぎると次の活動に繋がっていかないというデメリットもあるため、様々な人の意見を取り組み、講座を行う等の活動にも広げていくことも配慮している。

野菜カフェ　見守り応援団



認サポ　GH 管理組合



小学校認サポマスコット寄贈メッセージ



6　ステップアップ講座の開催状況・講座内容について

年度に 1 回 2 時間ステップアップ講座を市庁舎内で開催している。
＜講座内容＞
・キャラバン・メイトによる認知症サポーター養成講座の復習
・認知症サポート医の講義　かかりつけ主治医との関係づくり、認知症の方の体調管理の大切さ
・社会福祉協議会職員より「ボランティアについての心得」
・市・認知症施策担当より「他市事例紹介とオレンジサポート員活動発表」
・グループワーク（「こんな活動していただけませんか」「こんな活動ならできるかも」）

7　活動してきたことで得られた効果・見えてきた課題

＜効果＞
活動拠点が増えることで、今まで行けなかった方々にも足を運んでいただき交流の場として広がりつつある。地域のイベントに参加することで幅広い年齢層の方々にも認知症の普及啓発活動が行えている。
＜課題＞
オレンジサポート員が自主性を持って活動してもらうにはどうしたらよいか。活動拠点が増えたが、各地域での特色を活かした活動に繋げるにはどのようにしたらよいかという課題がある。

8　チームのアピールポイント

ロバ作りに参加されているチーム員、住民、認知症の本人・その家族の何気ない言葉から個別の課題、地域の課題、新しい活動ができるようにしている。

参加者が話しやすい環境をすること、じっくりと信頼関係を作ること、全員で活動しているという意識を持ち、小さなことからコツコツと行っている。オレンジサポート員の意見として、ひとりでは活動するのは難しい、不安があるという方が多いが、チームとしてなら活動できるサポート員は多く、実績を積んでいくことで認知症の本人・家族との交流や地域づくり活動に自信をつけてもらっている。自分たちが行っている活動を少しずつ外部に発信できてきているため、実感を持って活動している。

9　今後の活動について

認知症の人・その家族、地域との交流を深めていく。活動を外部発信し、地域のイベントに足を運ぶことで地域づくりをおこなっていく。

各地区での特色を活かした活動にしていく。







